The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上方文藝研究の現在（八）上方文藝研究の会
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	上方文藝研究. 2011, 8, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47709
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上方文藝研究の現在（八）

上方文藝研究の会

本連載も一端ここで一区切りとすることにした。最終回は、本誌刊行の母体である上方文藝研究の会である。

本会が、研究誌『上方文藝研究』創刊号を刊行したのは二〇〇四年。筆者が大阪大学に赴任して四年目のことである。

大阪大学の日本文学研究室には、大阪大学国語国文学会が刊行する『語文』、大阪大学古代中世文学研究会の刊行する『詞林』という二つの研究誌があった。しかし、近世文学研究の研究成果の発信という点で、たとえば貴重な資料紹介や翻刻、発見と報告、長大な論文などを掲載する媒体はなかった。また若手が思いきり自説を披露する場も欲しかった。筆者は、九州で大学院生が中心になって編集刊行していた『文献探究』や、研究同人誌『江戸時代文学誌』『雅俗』などに関わった経験から、雑誌が人を育てるということを実感していたので、大阪大学においても機が熟したら研究誌を刊行しようと考えていた。

しかし、大阪大学の近世文学専攻の教員・院生だけで、雑誌を起こすのはマンパワーの点でかなり難しそうであった。そこで、OB数名に、相談に乗ってもらった。二〇〇三年夏の学会の折りであった。筆者は趣旨を説明した。数ある研究誌の中で、存在感を発揮できる雑誌は、なんらかの特徴を持っている。「近世文学」ではなく、「上方文藝」ということを前面に押し出したい。その代わり、時代は近世に限定しないし、文学ばかりではなく歴史・美術・思想に領域を広げる等々。忌憚のないご意見も頂戴したが、幸いに大筋で賛成していただいた。その後もOBの方々とはメールなどで議論を交わし、ようやく、同年六月三〇日に、大阪大学のOBの方々向けに、発起人五名の連名（刊行準備委員会と称した）で趣意書を送り、ご協力を求めた。

その趣意書の一部をここに挙げておこう。

本誌は、文献的・注釈的研究を中心に、「上方」に関わる文芸研究を、ジャンルを横断し、また時代も近世のみに限定せずに発信する、総合的上方文芸研究誌をめざしています。「上方」をコンセプトにした研究誌は案外に少ないのですが、たとえば近世文学のどの分野をとっても、あるいは絵画・音楽・思想史などの隣接分野を見渡しても、「上方」を抜きにそれらを語ることはありえない状況だと思います。しかし、「上方」は「江戸」との対置によって、あるいは「上方」を賞賛する形によって語られてきたことが多かったように思われます。わたしたちは、文献的・注釈的研究を中心に、上方文芸の魅力を検証し、日本の、ひいては世界の日本文学・日本文化研究者へ向けて発信するつもりです。誌名には「上方」を謳っていますが、大きなパースペクティヴをもっていることをご理解ください。（下略）

やや力の入りすぎた趣意書で、今読むと気恥ずかしい。それでも、多くの方々にご協力のお申し出をいただき、創刊号を出せる手応えをつかんだ。表紙の意匠は、絵心のある大学院生に依頼した。規約を作り、ＩＳＳＮを取得した。会員は二十五名で出発。創刊号は無料配布するので、多くの会員が会費以外に資金援助を申し出てくださった。

創刊号は、二〇〇四年五月に刊行された。刊行にあたって、懐徳堂記念会の研究出版助成を受けた。そして、島津先生に創刊号巻頭論文を賜った。先生はなんと会員になって下さったのである。創刊号には発起人に名を連ねた全員が寄稿した。五百部を印刷。筆者らは、ドキドキしながら、六月の日本近世文学会会場で、用意した二百部を配布する準備を整えた。日曜日の昼休み前にアナウンスをさせていただいたおかげで、一冊残らず配布でき、その上約半数の方に次号以後を予約していただいた。この時は、本当に嬉しかった。力を得て俳文学会・歌舞伎学会・演劇研究会などでも配布した。

その後、近世文学会の会員名簿を頼りに、ダイレクトメールを出して案内するなど、広報につとめた。執筆会員・購読会員が二〇〇名を越えれば、研究誌としては一応名の知られたものになるだろうと思った。それは予想より早く達成された。当初は大阪大学出身者がメンバーの多くを占めてはいたが、それ以外の方にも入会を呼びかけ、また申し出られることもあって、阪大関係以外の会員もかなり増えた。

二〇〇九年三月には、肥田皓三先生の講演会を後援し、その内容を第七号に掲載した。会員外の方にご寄稿を求めたのはこれが初めてであった。

発足以来八年、会員は徐々に増え、現在では、執筆会員五七名、購読会員一七八名になっている（二〇一一年四月現在）。会の経営は近年ようやく安定してきた。懸案の会費の値下げも実現できるかもしれない。

さて、本会は、合評会と会員会議を年一回七月に行う。この合評会こそ、本会の醍醐味であろう。合評会の議論が楽しみで、東京など遠方からも会員が来る。参加者は大体十数名から二十名だろうか。来て損することは絶対にない。合評は三～四時間かけてじっくり行う。前もって読んでおかないと議論について行けないので、皆きっちり読んでくる。その徹底ぶりには、筆者はいつも驚かされる。執筆者の知らなかった事実の指摘、論としての矛盾の追及、文学史観を賭けての激しい議論、それらは本当に勉強になる。普段、静かな雰囲気の中で牧歌的ともいえる演習に慣れている院生にはいい意味で刺激になるようである。

入会・購読などのお問い合わせは奥付を御覧下さい。

（飯倉洋一）